

新編 河内神皇正統記
三



79
615
3





之邊海ふ陸たりのくま
 河の思ひことあふ舟に
 舟の思ひことあふ舟に
 舟の思ひことあふ舟に
 舟の思ひことあふ舟に

舟の思ひことあふ舟に



花

花

花

花
一丸
補

芒花 女郎花
燕尾香 桔梗
瞿麥



坂東氏
一丸

丁子菊

スガレ



鳥海氏

一潮

濱錦菊



神田氏

一笑

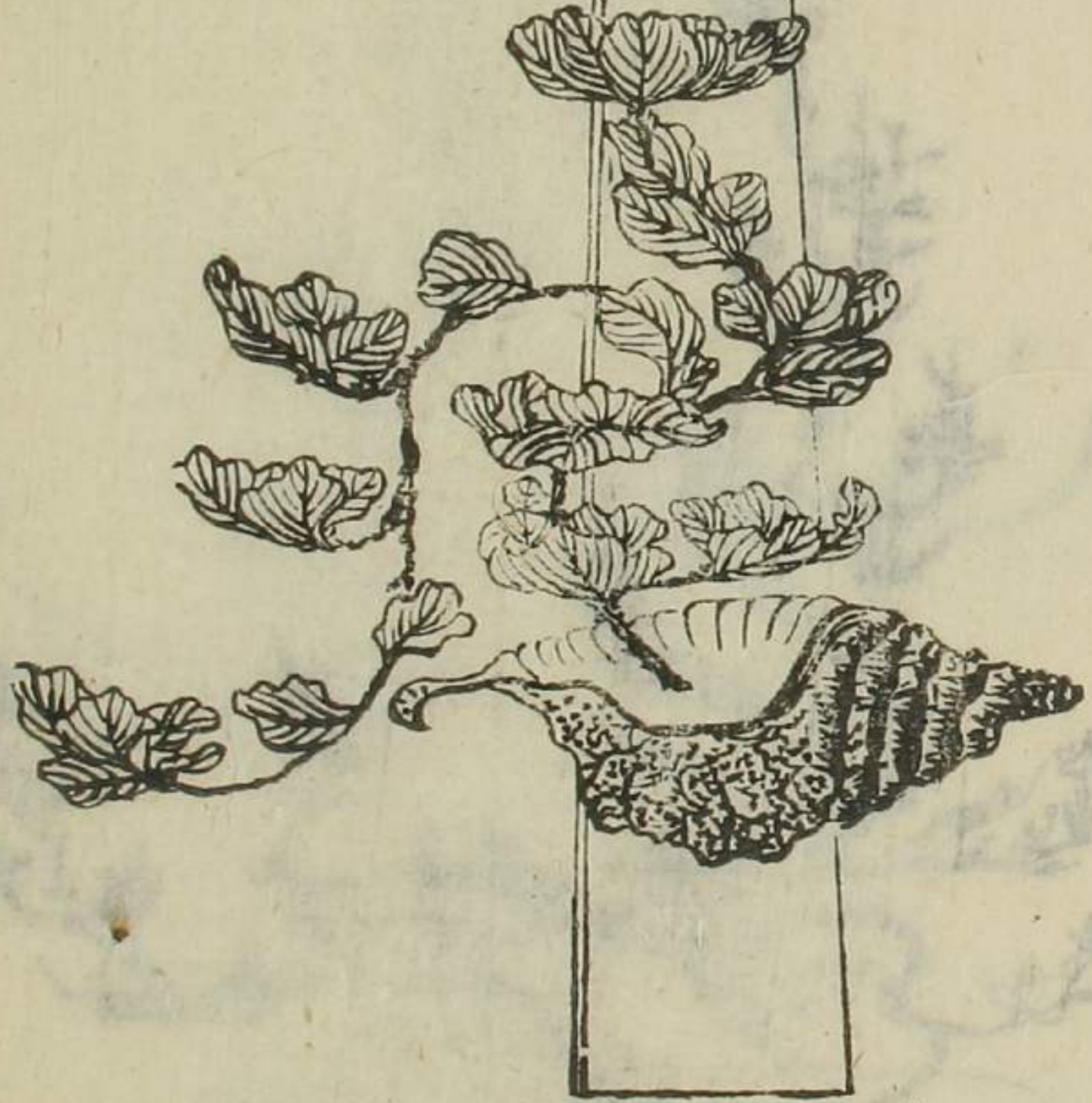
梅嫌
加賀白菊



田中氏

一沖

葉牡丹



林氏
一秀



藜蘆

藤平氏
一延

五

五



彼岸櫻
木爪
雁足

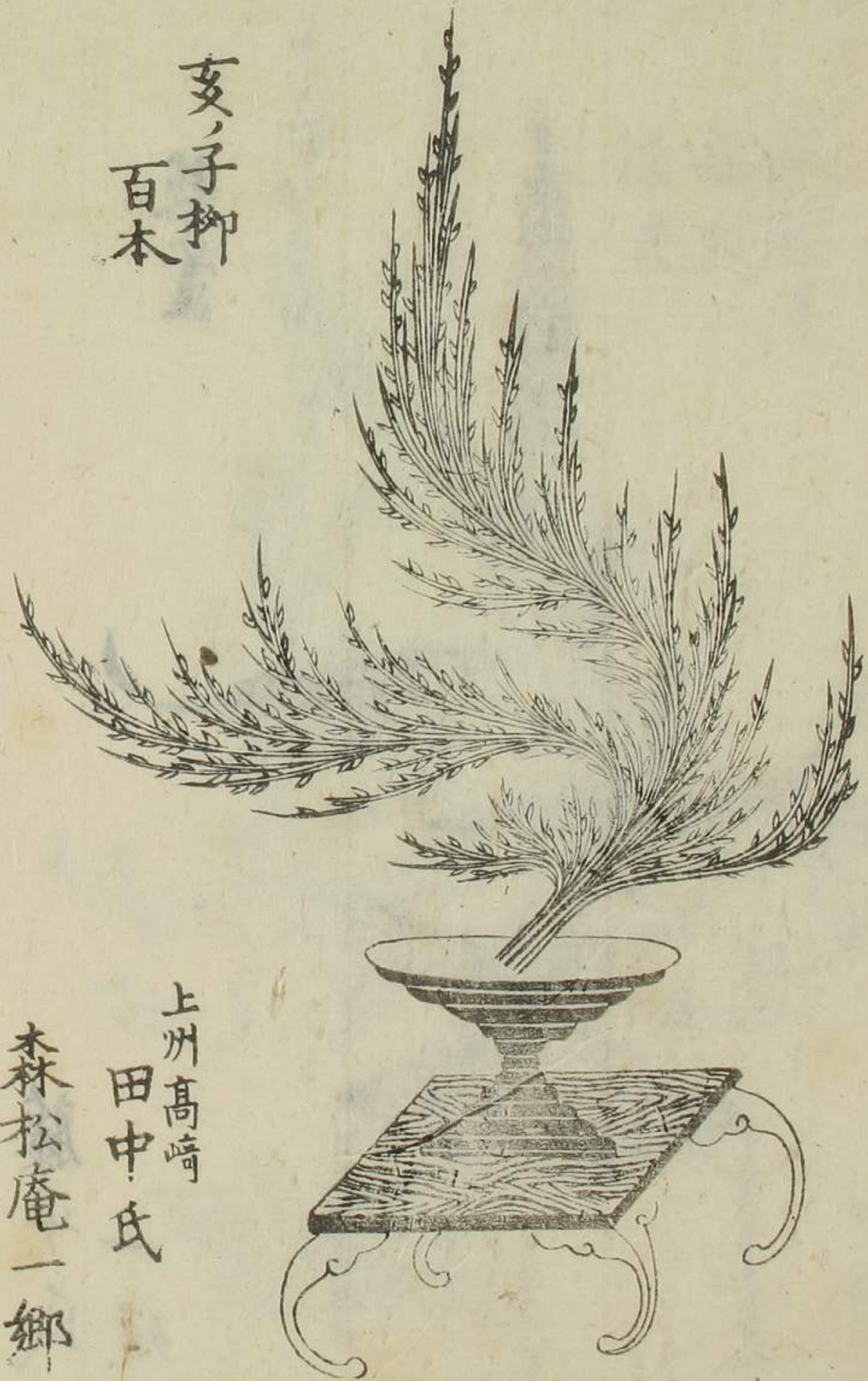
一倉

五

四

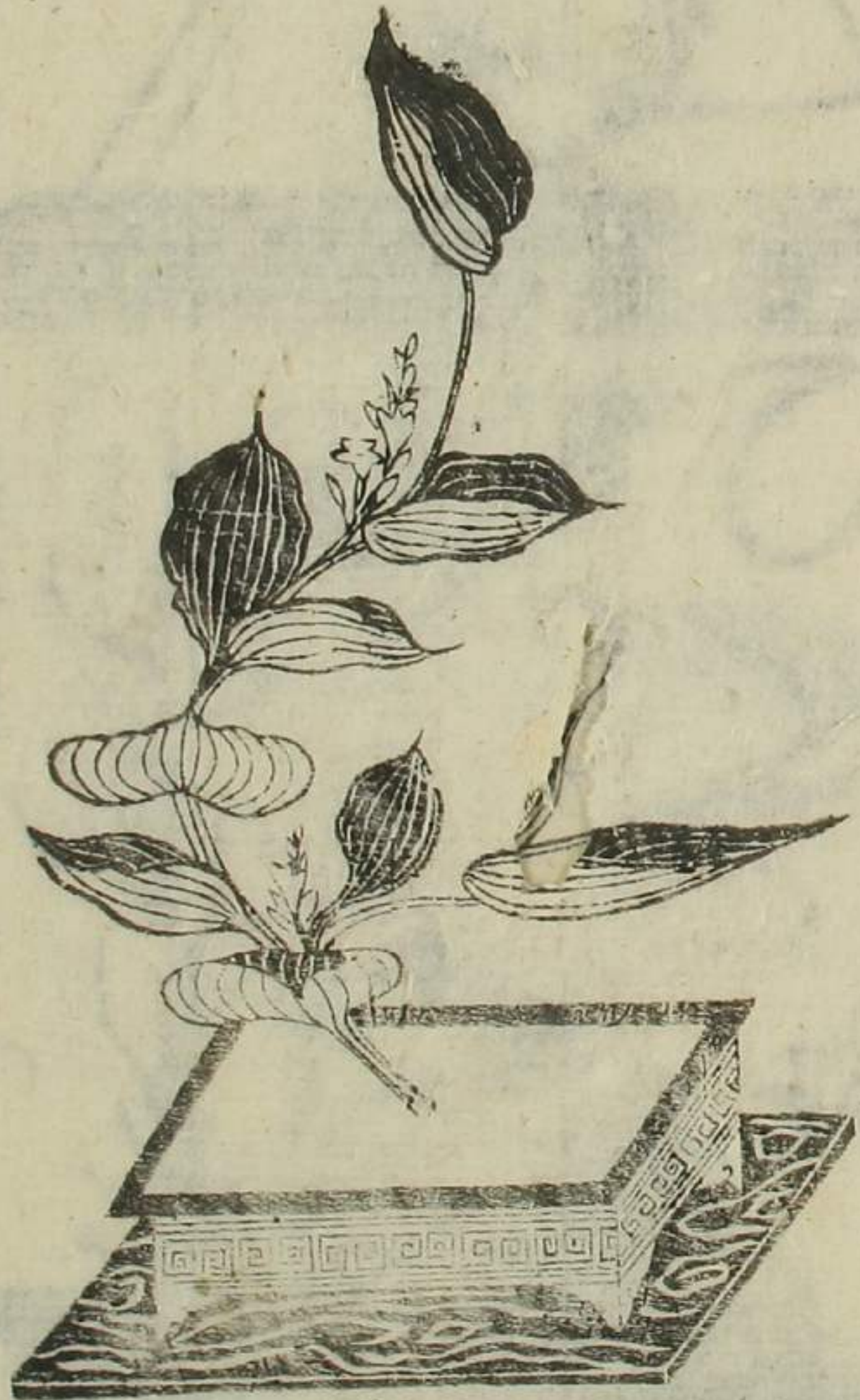
林乃

亥子柳
百木



上州高崎
田中氏
森松庵一郷

蓮花

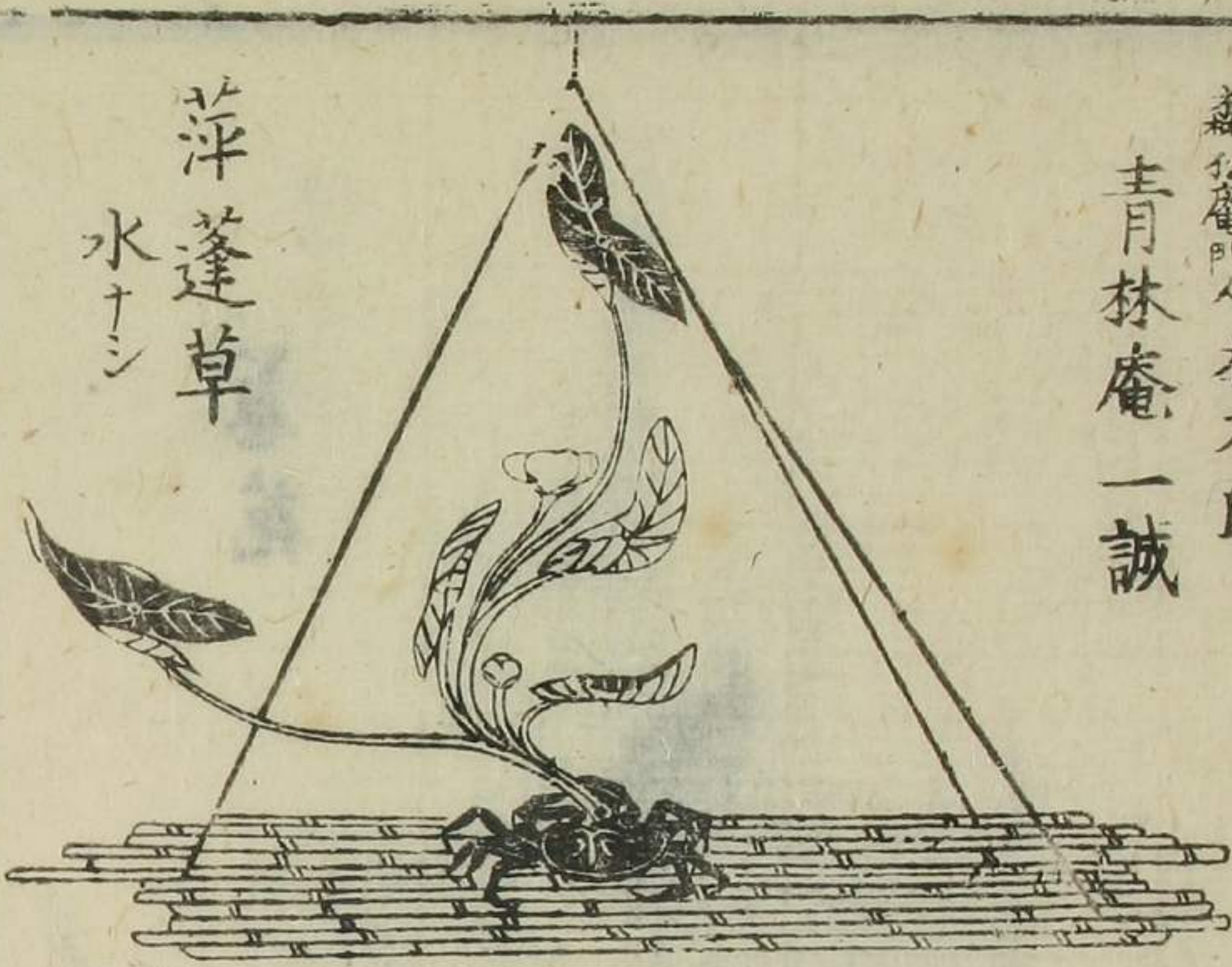


同所同門藤野氏
青雲庵一鳥

上七高壽
森松庵門人 植木氏

青林庵一誠

萍蓬草
水ナシ



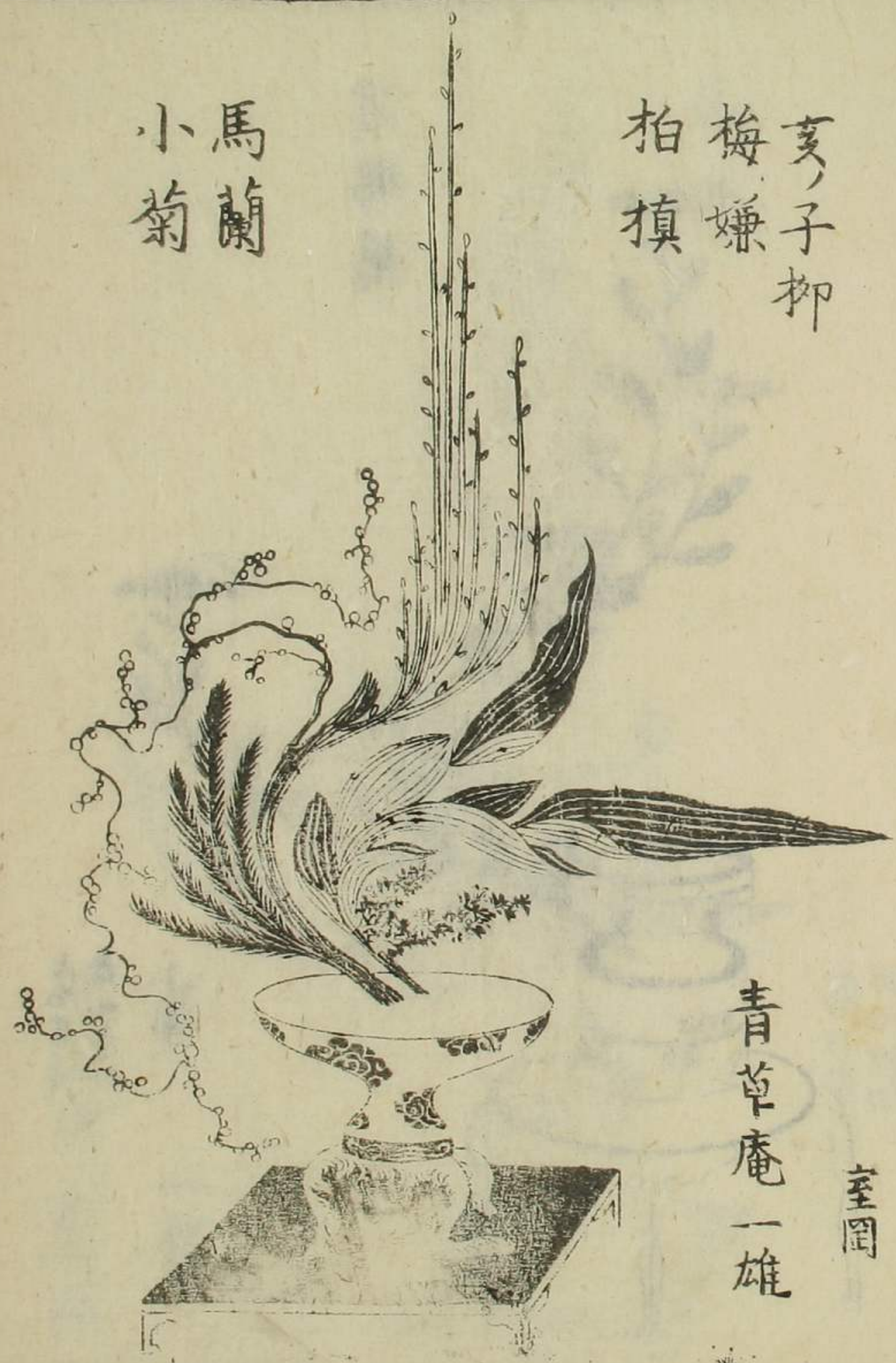
青蓋
枯蓋
澤三ツ葉



同野同門 橋本氏
青高庵一江

亥ノ子柳
梅嫌
柏槓

馬蘭
小菊



青草庵一雄
室岡

濱錦菊



上毛高崎
森松庵門人

小澤

一玄日

馬蘭



羽州野田
嶺松庵門人

奥山氏 龜溪

花菖蒲
山丹

同門人
山本氏一鶯



水仙

藤松庵一伊

伊藤氏



黄娘菊

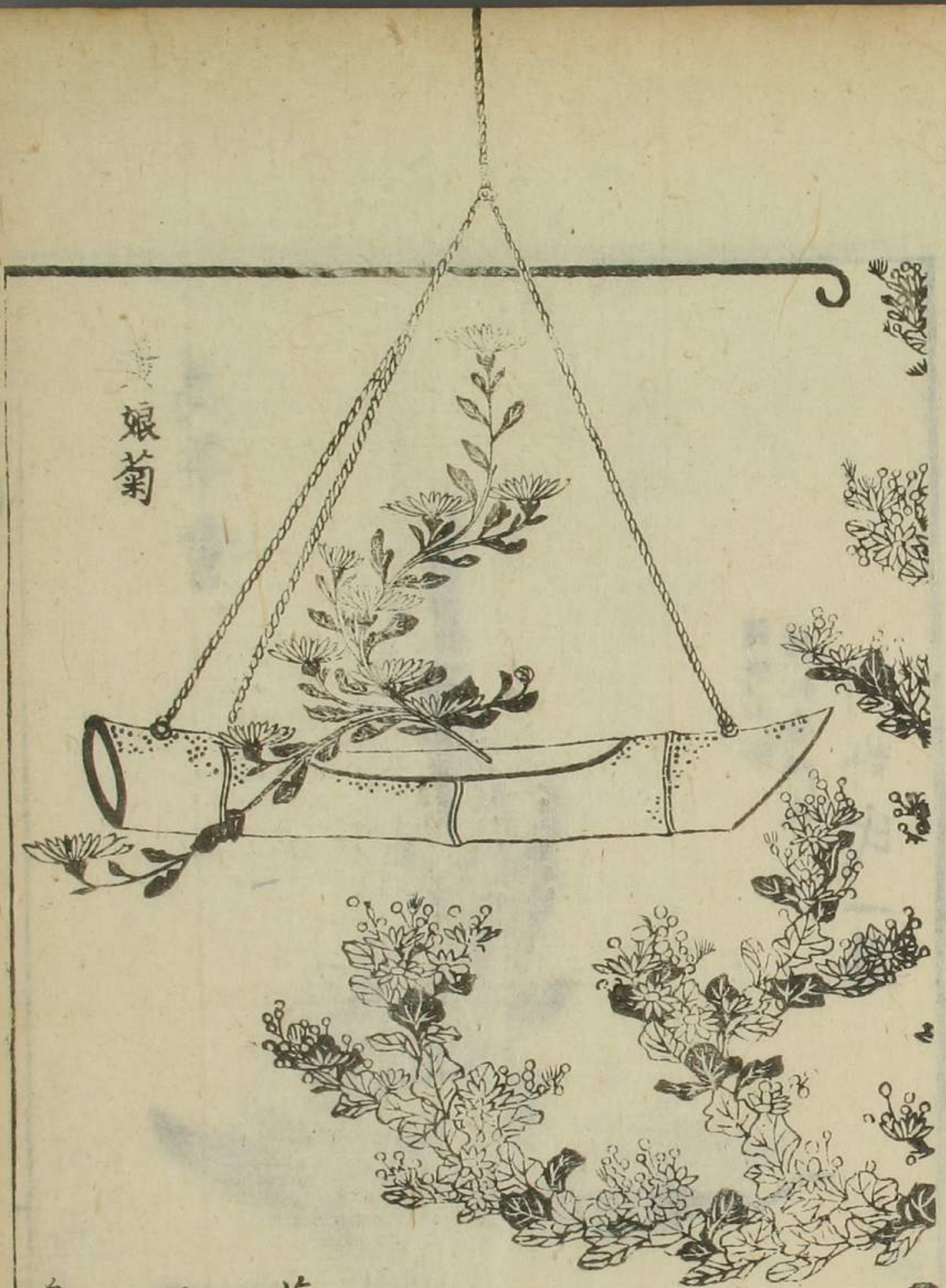


同

佛頭菊



藤松庵門人一靜
吉澤氏



娘菊

藤松庵門人
一魚
同門人
伊藤氏
船
一輝



赤寒菊
貳色

意匠

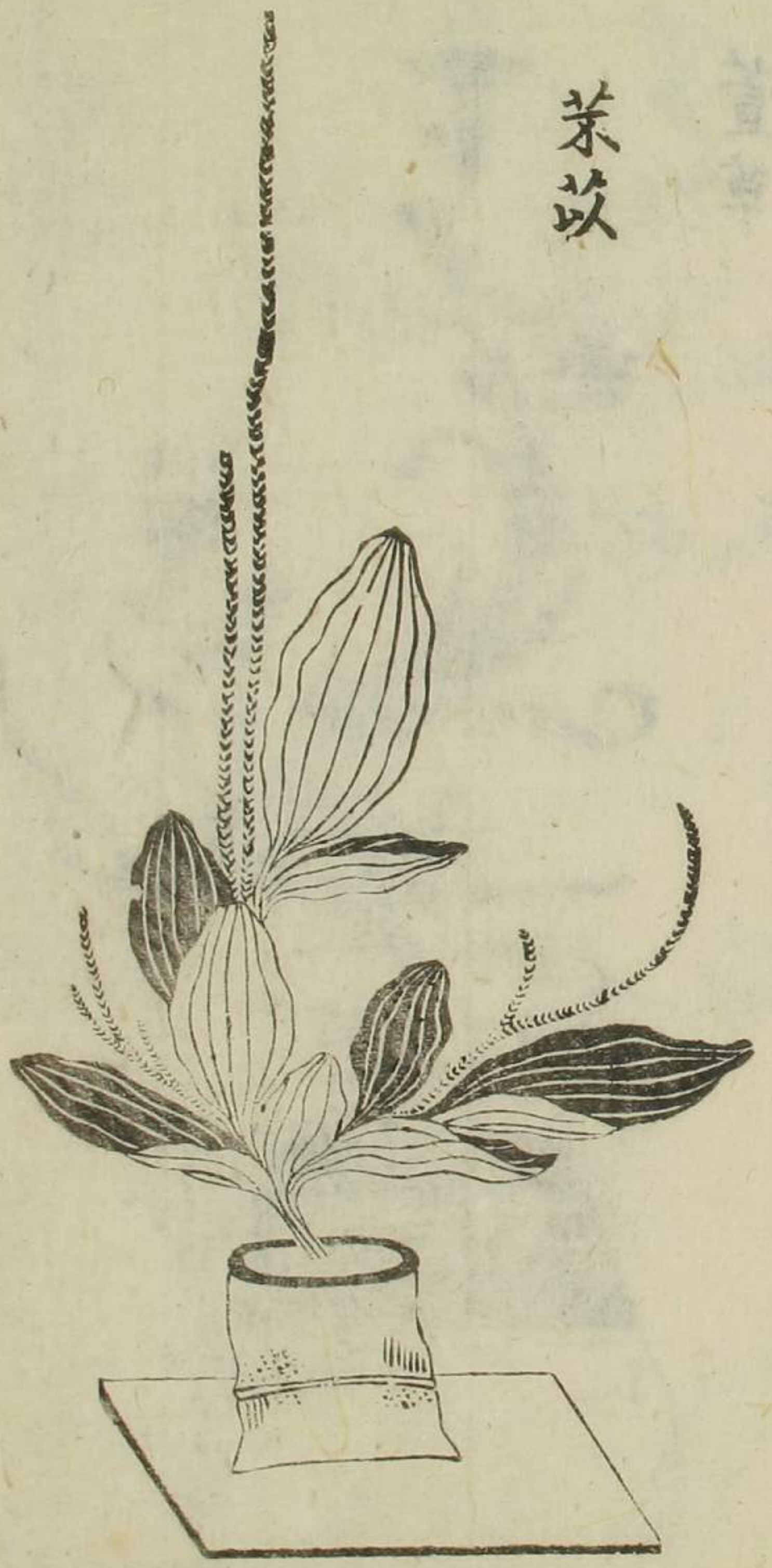
十

萬年青



羽州山形
嶺松庵門人
丹野氏一遊

茶以



羽州山形
嶺松庵門人

小山田氏
龜瀧



萱草



景松庵一泉

馬蘭



羽州山野邊
嶺松庵門人
小松氏一鳳

白玉椿



羽州墨沢
嶺松庵門人
渡邊一影



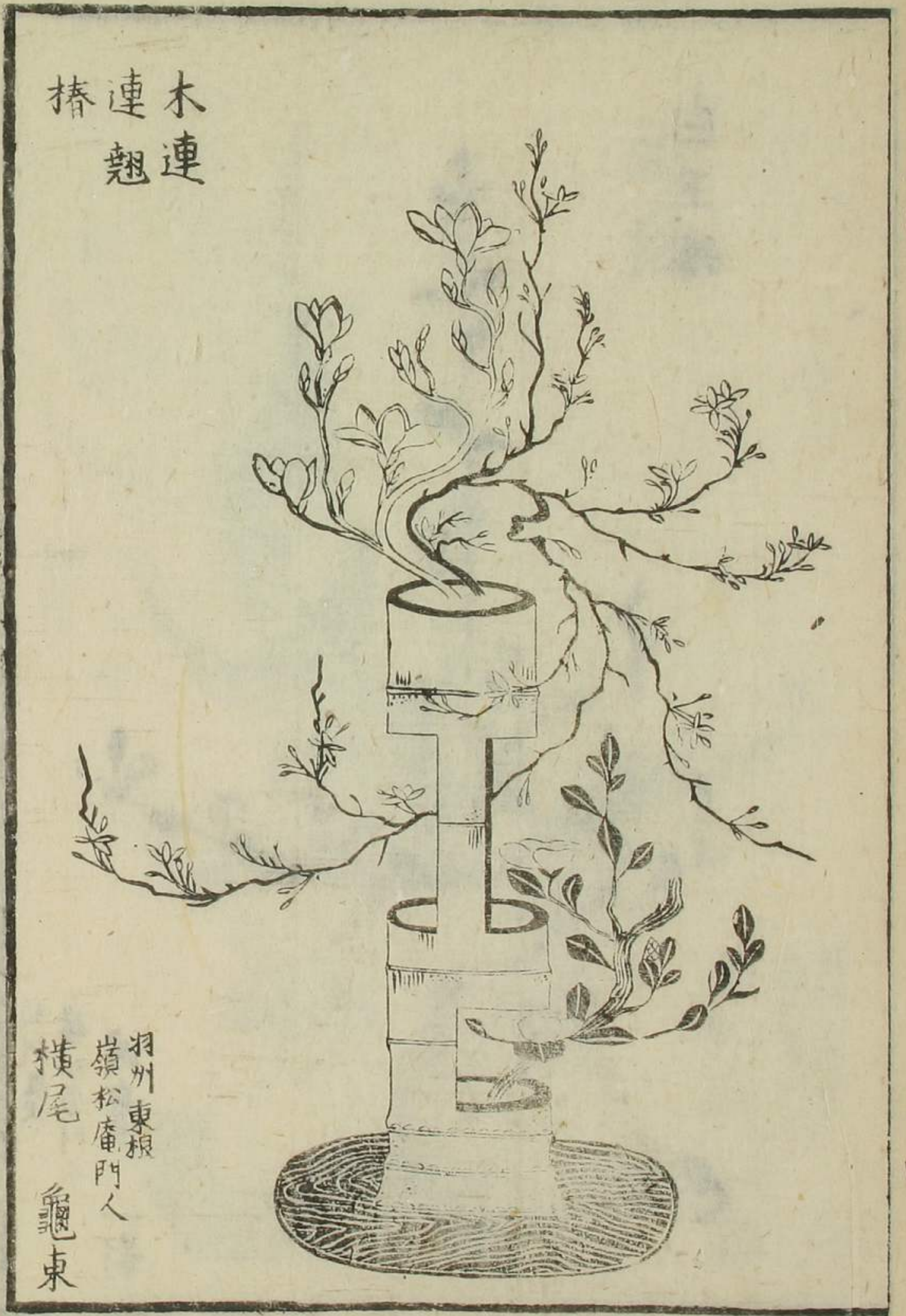
奧白菊
鶴九菊

羽州山形長岡氏

一朧

一五

一五



木連
連翹
椿

羽州東根
嶺松庵門人
横尾 龜東

一五

一五

雷電菊



蘿松庵一峨
土屋氏

茂
芬
芳
林

如
多
實
心

蘿松庵一峨

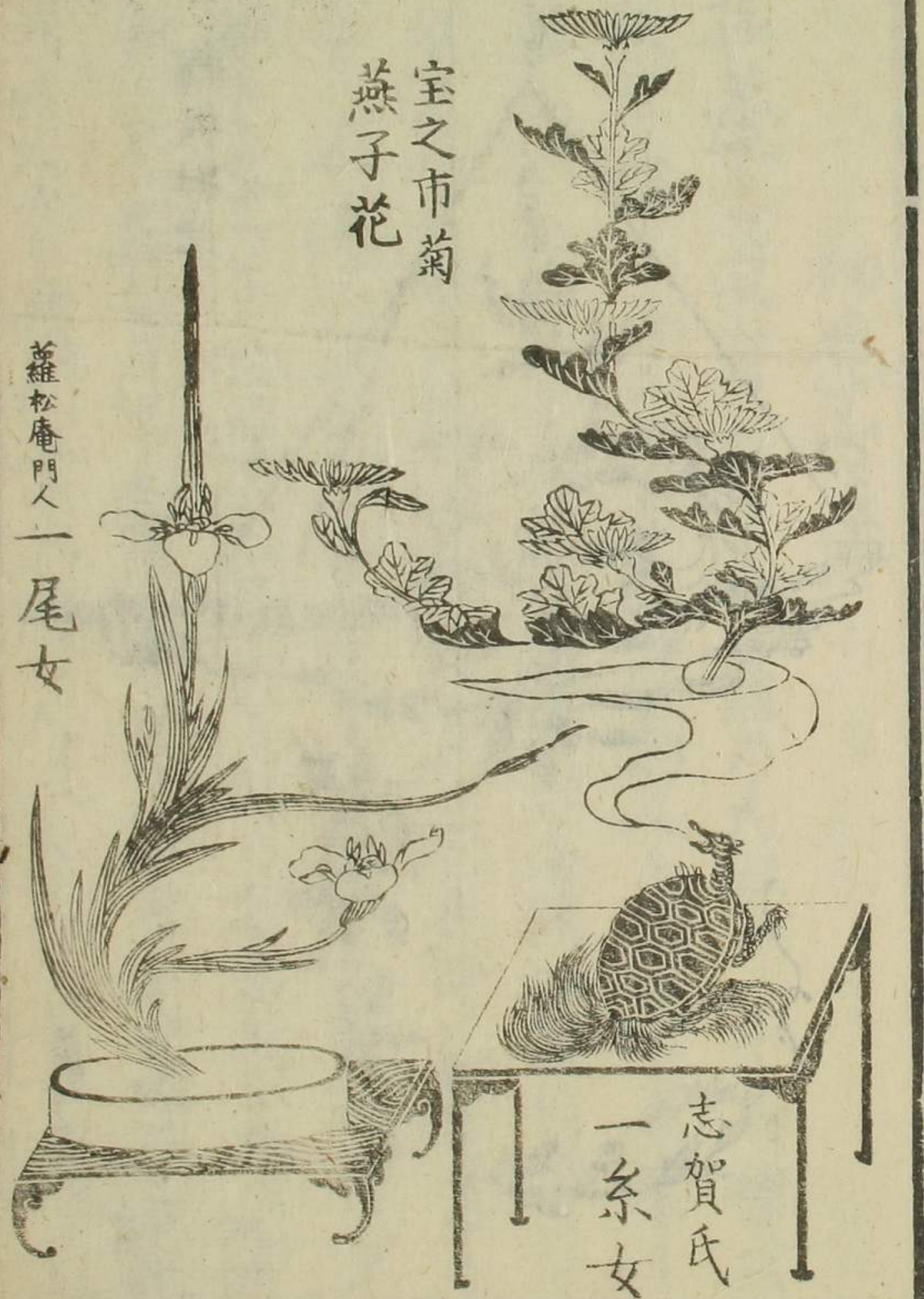


水仙 五元



土屋氏
蘿蔥庵一机

宝之市菊
燕子花



志賀氏
一糸女

蘿松庵門人
一尾女

104

纏枝牡丹



羅松庵門人

一湖

初學子心法

孤蓬庵宗甫君之當流の元祖也。御緯以
 政一と稱し給ふ故に其流を酌人との字と表懐し
 用るとある。ゆゑに就中授受の正流と得給ひし
 諸先哲の右に記しあるなり。近來挿花政業と
 する人徒ふ一の字と受て事を知り先哲の稱取
 知を妄りし其稱を冒して志の恭敬を失ふ者
 多し。若し若かりし能くは是亦尾花龍の甚敷
 ののたうり我門葉ふ遊りん人ともうしむるはえ

毎々あり
 挿華の草木の天然と失つゝ其性めちるひそ
 穂葉一人の眼を悦びし先師傳まは法とて
 得し是のぬき流の我はたつ庵号一号を因ひて
 然るに一庵とてたゞ世人はかゝるはふり
 本意たゞありせし師門を蔑如し罪は
 先哲の得く楯庵号を稱し私に流法をたて
 人と欺き世人も又詭つてわづら師を何は
 中興ありて人々のやうに其師の庵号を表徳

其儘受く二代之師といひの類もつゝあや
 風雅の道にあひては殊にやむつゝ也醫業
 扁鵲あり射術小翠あり又冶工の類も同名成
 龍名の例は多しやつゝも詩歌連体茶事
 といふ師の名を龍名の例我しは是とて
 一壽の傳ふる所也 宗甫君の流たりのり
 たつゝいふ流祖の名字謚命日ふ至るも皆知
 せんといふと常々是を遺教といふ也
 先師の恩とあつゝあつゝ如斯くは

業尊うゝん

道よ古今たゞく業を新舊のへん常たるは徒らふ
 古を好む時宜と斟酌せらるる死法あり古を
 本として時宜をよりて轉化する是と活法との
 花配りのこと此木莖と前切了三又と作り瓶中
 施して根と固むること舊くされ夫として皆固
 ならずしりこころいひ得るはな三年學あり
 其業と得るぬる人多く一壽是と憂の百ありて
 是を考へらるるはなむく文化幸未のこゝ思ひ

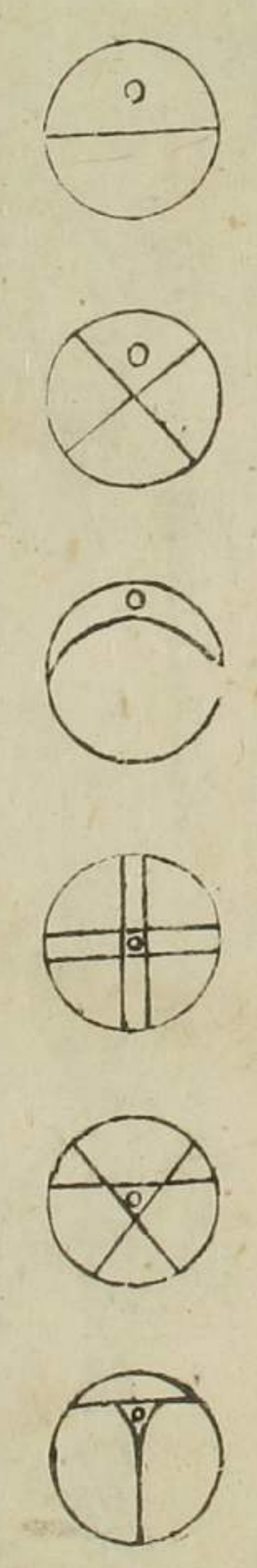
得るこゝろの其術の莖と裁割し中を削りて
 薬研の形ちりて試し瓶中小配りて花枝と挿しぬ
 心の儘も固の得る志をも物持をひ是と薬研配
 名付く人よもあむ世の人をわぬのこゝろ
 譏笑しつゝわつゝ真をまめ草と前よりせとく
 りらるるあそり斯く此法を用る人其便りあり
 りらるる術の遠く安を流る當流らるるたう地流
 りらるる此法を用る事ありあり只此一壽一壽此
 道よひしてつゝ功と後世に遺せしむる也

二二二

二二

○草木の縮葉を其佳しものたるあり
 又花壽と保ししもの其傳之多し
 一草木共最初は真と云ふ事一蓮花洋蓬草即柿並水あり柿事
 一竹の枝を養ひ并割竹一節切竹水の事一燕子花水の事
 一水仙の花板出して遣ふ事一同葉平は揉み并四枚葉別々に遣ふ事
 一水仙後猴立並内の葉と長く遣ふ事
 一馬蘭逆真と云ふは小葉と遣ふ事
 一草木花葉枝が相應の事

花配之事

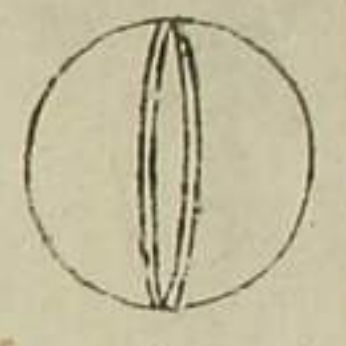


花配は諸先哲の工夫より各々名ありたり
 記さる傳ふと受く知るなり
 只平の自得せしもの
 配と嘲りたるも諸君得意のたらし大昔より花配り成
 図して看るなり

流祖遠州公の三股配は寛永年中の工夫あり
 木の三股と切り細物に用ふる所あり



丸木と割て開き遣ふ事の安永の頃春秋軒一葉も君も
始り蒙かり是まき諸君も我も専小用一所あり



予り自得せし蒙の薬研配の文化の頃始り最初
諸君の笑を受し今に謀り人々又他流も
専ら用ひ事なりぬ吏而已あり各ふ門書を
持しゆし専の工吏せし用ひし
者も支ふる工吏せし言ひし専
用ひし諸君一人も多し用ひし
我も喜ひし思ひし而已

里松庵誌

此二百十有五
海軍少将の
りる或とう
けりる春の
きし蒙の
起りる

意西下

智之十之云

未初涉子山為住

里松庵一壽撰

文學社

子時之...



圖書印

龍潭畫



再白

菊一百拾五輪

水仙五拾本

馬蘭百枚

此圖後篇出

